

ASAGOING ゼミ U-18 現代文・社会

以下の文章は、生野町黒川集落と、そこで『農家民宿・まるつね』を営む「夫婦の物語」で、これらを読んで、続く問いに答えてください。

一、消えゆくふるさと

黒川集落は、黒川ダムのおひざもと。朝来市中心部から車で約1時間、うつそうとした林の中の道を抜けた先にひっそりとたたずむ標高約500mの小さな村だ。

この地域では、住民の都市部への流出が止まらず、激しい人口減少にさらされている。現在は黒川区全体でも24世帯51人、『農家民宿まるつね』のある黒川本村集落に至っては12世帯28人しか住民がいない。住民は最も若い世代で30代、多くはお年寄りで子どもがいる家庭はゼロ。小学校も中学校も20年以上も前に町の中心部の学校に統合され、地域に学校はない。これといった商店もなく、日用品の買い物も車で30分はかかる。もちろん、企業のオフィスなどがあるわけでもなく、ここに住みながら都市や市内中心部に毎日通勤するのはたいへんだ。病院もなければ役所などの施設もない。新しくそれらを作ろうにも、そもそも人がいないので利用者も少なく、費用の効率が悪いため作るに作れないのだ。しかも冬場の寒さは厳しく、氷点下まで冷え込むこともザラだ。黒川集落は、③「何もないイナカ」なのである。

それだけに、ある「大きな問題」を抱えている。集落の「消滅」危機だ。「何もないイナカ」の暮らしに嫌気が差し、集落を出て都会暮らしを始める人が出るのも無理はないだろう。ここで生まれ育った子どもたちも大人になると同時に都市へ出て、そこで仕事をを見つけ、家族を作る。マイホームも建て、帰ってくるのはお盆やお正月くらいだ。都会から移住してくれる人がいればまだ良いが、お店もない、学校もない、まして仕事もないというのでは移住しづらい。子育て世帯ならなおさらだ。

また、地域(集落)においては、そこに暮らす人が協力しあう②「共同体(コミュニティ)」としての機能があるが、人が少なくなればそれも果たせない。こうしてますます人は出ていき、新しい人は入ってこない。過疎化が進むなか残されるのはお年寄りばかりで、その数も少なくなるいっぽう。そのうえ新しい世代は生まれないので、このままだければ地域そのものが消滅する。こうした①「限界集落」は日本に1万以上あるといわれており、黒川集落はその一つなのである。

そんな黒川集落だが、自然は豊かだ。周囲を山と水田に囲まれ、澄んだ空気に包まれており、夜には満天の星が広がる。集落内には清流が流れ、国特別天然記念物であるオサンショウウオを見ることが出来る。美人の湯として有名な温泉(黒川温泉)も湧き出している。

③ 「何もないイナカ」であることは、都会で暮らす人にとってはとても魅力的だ。常に刺激と娯楽、モノと情報、たくさんの人間であふれる都会での生活だが、そんな暮らしに息苦しさを感じる人も少なくない。何もないからこそ、何もしなくていい——そんなのどかな環境や癒しを求め、休日には都市部だけでなく海外から訪れる旅行者もいる。中には、ここに別荘を構える人もいるほどだ。「何もない」ことが逆に幸いなのである。

ただし、ここで述べてきたように、何もないのでかさと、何も無い不便さは常に同居する存在だ。のどかな暮らしへの憧れだけで、不便さなどの現実をよく考えずに移住してきた人は、暮らし始めてから苦労することが多い。耐え切れずに再び都会へ戻っていく事例も日本中で見られている。

都会からたまに遊びに来るぶんには良いかもしれないが、いざ住むとなれば不便なことが多すぎる。外から見ると、実際に暮らすのでは、まったく違うのである。

問1 (1)

① 限界集落とはどのような集落ですか?
40～60字以内で簡単に説明してください。

(2)

① 限界集落が生まれる大きな理由に、「新しい世代の住人を産み出す若い人が住みにくい」ことがあげられます。なぜ若い人が住めないのですか?
文中から見つけ、5つ以上あげてください。

問2 (1)

② 「共同体（コミュニティ）」としての機能には、例えばお祭りや冠婚葬祭（結婚式やお葬式）の手伝い、農作物の収穫、地域の清掃活動などがあります。地域住民が協力しあうことで、地域を活性化するのです。あなたの暮らす町では、どのような「共同体（コミュニティ）」としての機能がありますか？ 地域の人たちが協力して行っている活動やグループ・集団で、思いつくものをあげてみましょう。

(2)

もし、あなたの町からそれらの②「共同体（コミュニティ）」としての機能がなくなったら、町はどうなると思いますか？良いことでも悪いことでも構いません。あなたの意見を述べてください。

問3

③ 「何もないイナカ」であることは、都市に暮らしながらたまにそこへ訪れる人と、実際にその「イナカ」で暮らす人とはとらえ方が異なります。それぞれ「何もないイナカ」をどんなふうに考えていますか？

住んでいる人	都市の人

問4 (1) 二つのものが、表と裏のように密接に関係していて切り離せないことを表す四字熟語で、「表裏一体」という言葉があります。文中には、この「表裏一体」の例を具体的に示している箇所がありますが、それはどこでしょう。30字以下で抜き出してください。

(2) ものこの一つの側面だけを見て判断しないためにも「表裏一体」を知ることがとても重要です。そこで、あなたの身の回りのできごとや経験を具体例にあげ、「表裏一体」という言葉を使った例文を作ってみましょう。

二、限界集落での挑戦

黒田哲郎さん(47)と真澄さん(51)は、そんな黒川集落で『農家民宿・まるつね』を営む仲の良い夫婦だ。真澄さんは黒川で生まれ育ち、短大進学と同時に大阪へ出た。真澄さん自身も、こんな何も無い田舎がイヤだったからだ。卒業後も大阪に残り、グラフィックデザイナーとして活躍していたが、30歳を前に「あること」に気付いてしまったという。「わたし、ぜんぜん靴が汚れていないな……」

黒川と違って、大阪は高層ビルが立ち並び、コンクリート・ジャングルだ。道路はアスファルトで固められ、「土」と言える地面がほとんどない。しかし、それに気付かずいた。地面には土がある——そんな「当たり前」の自然「すらない生活に慣れ切っていた自分に、忘れていた自分に、急に違和感を抱いたそうだ。それから「土」を感じたいと公園や神社へ出かけたが、それは人工的に作られた「土」であって、整備は行き届き、草ひとつ生えていない。「こんなものは私の知っている土じゃない!」、そう感じたという。そういうえば、ここには「水」もない。星も見えない。少なくとも、私の知っている土や水や星はひとつもない。部屋の飾り物にする石や木さえも、ここではお金を出さないと手に入れることができない。そんなもの、黒川にはいくらでも落ちていくのに。

そう考えたとき、もうここにはいられないと思った。「黒川に帰ろう」。戻ったところで、仕事のあても何もなかったが、それより何より「^⑤生きている実感」が欲しかったのだという。都市での生活は、「作られた何か」の中に自分が組み込まれて、生きていくというより、都市を構成するひとつの部品として生かされているように感じた。^⑥もちろん、決して大阪がダメな町だというのではない。便利で、何でもあつて、おしゃやれで、輝いていて、そういうのが好きな人だつて大勢いる。ただ、自分に合わなかっただけだ。人工的に作られたもの・作られた町・作られた自然ではなく、それらの部品として取り込まれるのではなく、ありのままの自然の中で、そこにあるものをそのまま受け入れる。それらと共に生きる。そんな生活に還りたかったのだ。

いつぼう、哲郎さんは神戸市の生まれだ。設計士として活躍していたが、ある日友人に誘われて黒川を訪れた。友人は黒川の地域活性化活動に参加しており、それを手伝つてほしいと声をかけられたのだ。そしてそこで真澄さんと出会い、結婚し、空き家となつていた真澄さんの実家を改装して二人で『農家民宿・まるつね』を開いた。哲郎さんも、この黒川が好きになつていった。

しかし、哲郎さん一人が住民として増えたところで、黒川集落が消滅の危機にある大勢は変わらない。二人が農家民宿という商売を選んだのは、外からこの集落を訪れる人たちを増やしたいと思つたからだ。^⑦宿があれば泊まりに来る人が増える。訪れる人が増えれば、多くの人が黒川の魅力に気付いてくれる。その中の何人かでも、黒川に移住したいと思つてくれる人がいれば、住民も増え、集落が活気づく。消滅への道を止めることができずとも、増えるかもしれない。そう願つたからだ。実際、『まるつね』の評判はじわじわと広がり、家族連れや友人グループで訪れる人、気に入つて何度も訪れてくれるリピーターの人も増えた。

もちろん、だからといってまだ課題が解決したわけではない。「ここまでやれば絶対に大丈夫」という明確なゴールなどないし、そういう意味では、終わりになき挑戦といえるだろう。

なのに、黒田夫妻はどこか楽しそうだ。哲郎さんは言う。「僕たちは、『やらなければ』という悲壮な使命感でこの問題に取り組んでいるわけではない。楽しいからやっている。そんな姿を見て、『なんか面白そうなことやってるな』と感じてくれた人が、仲間として増えていけばそれで十分。そうすれば、おのずと結果はついてくると信じています」。

黒川を残したい。5年先、10年先だけでなく、自分たちがもういないだろう100年先にも——今日も、黒田夫妻の未来への挑戦は続く。

問5 ④靴が汚れていないについて、続く問いに答えてください。

(1) なぜ靴が汚れていないのでしょうか。黒川にあって、大阪になかったものをふまえ、400字以下で説明してください。

(2) 靴が汚れていない事実に気づいたことで、彼女は何に対して違和感を抱いたのでしょか。

問6 真澄さんの抱いた⑤生きていく実感とは、具体的にはどういう生活で得られるのでしょか。

文中から800字以内で抜き出してみましょう。

問7
(1)

⑥ もちろん、決して大阪がダメな町だということではない。便利で、何でもあつて、おしゃれで、輝いていて、そういうのが好きな人だつて大勢いる。とあるように、真澄さんは、一時大阪に暮らしたからこそ、都会の良さと同時に、黒川の良さ・黒川にしかないものにも気付くことができました。では、私たちが暮らす朝来にあつて都会にない（朝来には多く、都会には少ない）もの、逆に都会にあつて朝来にはない（都会には多く、朝来には少ない）ものには、どんなものがあるでしょうか？思いつくものをそれぞれ10個以上あげてみましょう。

朝来にあつて（多くて）、都会にない（少ない）もの

都会にあつて（多くて）、朝来にない（少ない）もの

(2)

想像してください。あなたは朝来市長になりました。朝来市をもっと住みやすい、良い町にするのがあなたの仕事です。問7(1)であげた例をもとに、市長として「この先の未来も朝来に残していきたいもの」と、「今はないが、朝来にもあると良いと思うもの」を抜き出し、理由とともに説明してください(いくつでも)。

							この先の未来も朝来に残していきたいもの
							理由

							今はないが、朝来にあると良いと思うもの
							理由

(3)

では逆に、問7(2)であげなかったものについて考えてください。なぜあなたは、それを「残さなくても良い」、あるいは「朝来にはなくても良い」と考えたのですか？理由とともに説明してください。

						朝来にあるが、残さなくても良いと思うもの
						理由

						今はないが、今後もなくて良いと思うもの
						理由

問8

⑦のように、ひとつの前提をもとに、発想を数珠つなぎにして前へ前へと進めながら考えていくと、求める結論を出しやすくなります。こうした発想法は「論理的思考」のひとつです。この場合は、「宿を作る↓人が来る↓黒川の魅力に気付く↓移住したいと思うようになる↓住む人が増える↓集落がなくなるならない」という進め方ですね。では、もしあなたなら、黒川集落を存続させるためにどんなことをすれば良いと思いますか？本文から「現在の黒川に足りていないものももしあったら？」といった考えを足がかりに、発想を数珠つなぎにして論理的に考えてみましょう。

